1

お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
山本　　昇	男　性	９５歳	２９歳	黒　田



▲　中国徐州の山本さん

①　８月１５日は，どこでどんなことをしていましたか。

豊橋の八町にある藤田印刷工場で働いていました。従業員８０名の大きな印刷工場でした。

②　終戦のことを，どこで，どのように聞かれましたか。

印刷工場で，天皇陛下のラジオ放送で知りました。

③　敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

これで戦争が終わると思って，ほっとしました。

④　体験の中で，子どもたちに語り伝えておきたいこと

「中国出征と在郷軍人」

私は昭和１３年８月１２日，臨時召集により豊橋の１８聯隊*1 に配属されました。この頃は，まだ出征する人は少なく，黒田でも初めの方でしたので盛大に見送ってくれました。花火が打ち上げられ，清水野小学校の音楽隊の演奏で新城駅まで送っていただきました。４ヶ月あまりの訓練後，１２月４日に大阪から出港し，１５年７月に召集が解除されるまで中国に出征していました。支那事変*2 のための出征で，独立歩兵第２４大隊に所属していました。中国では，山東省にいました。石炭の炭坑の警備も兼ねていました。炭坑では，およそ３，０００人の中国人が働いていました。



▲　出征する時の記念写真　（山本昇さん提供）

中国に到着した当初は，中国人を斬ったり家を焼いても構わないという指令でした。それが，半年もすると中国人には絶対手を出すなという指令に変わりました。

徐州まで１週間の予定で行軍*3 したことがあります。ところが道が分からなくなって，徐州に着くのに１０日もかかってしまいました。食糧が尽きてしまい，空腹で困りましたが，在住している日本人が食糧を調達してくれて助けられました。徐州に着いて，夜中に寝ている兵士が支那（中国）の兵に射殺されたことがあります。

---

*1　陸軍歩兵第１８聯隊は現在の豊橋公園に設置され，記念碑が残されている。
*2　１９３７年（昭和１２年）から始まった，日本と中国の間で行われた長期におよぶ大規模な戦闘のこと。
*3　部隊が次の目的地に向かって移動すること。危険をともなうことが多かった。



▲ **戦闘訓練**　昭和１４年



▲ **徐州への行軍**　昭和１４年　　（写真はすべて山本昇さん提供）

また，当時の日本の銃は空冷式で性能がよかったのですが，中国は水冷式で粗悪でした。しかし，アメリカ軍の支援を受けるようになると，銃器の性能がよくなっていきました。

私は，昭和１５年の秋に，広島に第１便として帰ってきました。帰ってきたばかりの兵士は気が立っているのか，こんな事件を目撃しました。

広島駅から二人の若い兵士が乗り込んできました。二人は，たわいもない話をしながら談笑していました。すると，近くにいた帰還兵の将校*1が，突然軍刀を抜き，笑っていた一人の若い兵士に向かっていきました。「たるんどる。貴様はそれでも日本兵か！」と怒鳴りながら，軍刀で斬りつけたのです。若い兵士は，左肩の辺りを切られ，血がふき出しました。突然のできごとに，まわりにいた人たちは驚き，ただ見守っているだけでした。もう一人の若い兵士が手ぬぐいで傷口をおさえ，二人は列車を降りていきました。斬りつけたのが将校だったので，誰も何も言えなかったのです。こんなことが許されるような時代だったんですね。同じ日本人同士でもこんなことがあったのですから，中国人に対してはもっとひどいことが，日常的に行われていたのです。どんなことがあったかは，とても申し上げられません。



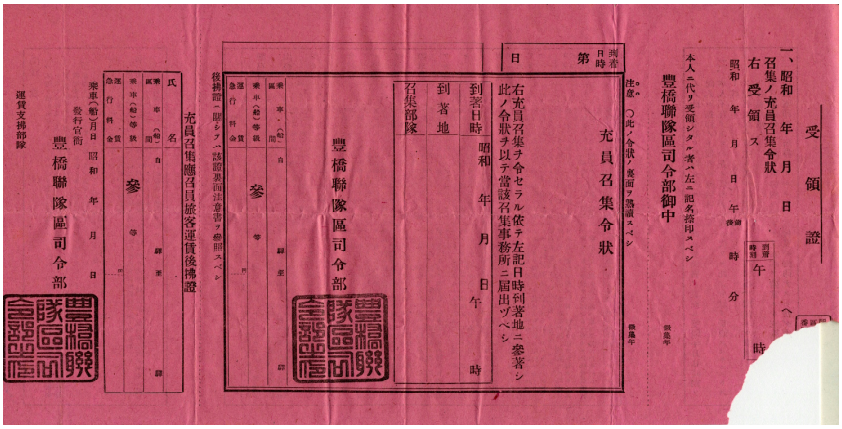
▲ **山東省 中日親善のたれ幕も**

軍人の心構えとして，戦地にいる時は，「捕虜になったら腹を切れ。いつでも腹を切る覚悟でいろ。」と教えられていましたので，軍刀を肌身離さず，いつも殺気立っていたのです。ですから，戦地で過酷な体験をして日本に帰った時，だらけた兵士を見るのが耐えられなかったのです。

---

*1　将校は，部隊を指揮する権利を持つ士官とされ，少尉以上の軍人をいう。Ｐ－２５－参照。

第１便の兵士は，奈良でいったん集結し解散しました。次の第２便の人たちは，大東亜戦争*1 の準備のため，帰国せず中国に戻ることになりました。「兵隊は運だ」と思いますね。私も２便として出れば，帰ることはできなかったと思います。



▲　山本昇さんが所蔵されている召集令状（赤紙）

昭和１５年１１月に豊橋へ戻ってからは，国府で働き，１６年４月から藤田印刷という軍属の印刷工場で働いていました。当時は，印刷工場が県内に３カ所しかなく，召集令状や配給切符をはじめ，軍隊関係のものを印刷していました。そのためか，私のところにはもう召集令状は来ませんでした。軍の仕事をしていると考えられたためだと思います。召集令状の印刷は，３人の憲兵が立ち会い，夜中の午前１時から３時までに印刷するようになっていました。４時には，憲兵が刷り上がった召集令状を持って軍に戻りました。配給品の印刷の場合は，１週間家に帰らず，印刷所に泊まり込みになりました。公表前に知られると，品物を買い占めたりするので，配給品の一覧の印刷は極秘事項だったのです。

私は１６年の１月に結婚し，豊橋で生活していたので印刷所へ勤めましたが，もし新城で生活していたら，大東亜戦争の召集令状が来ていたかもしれません。

大東亜戦争の頃は，多くの男たちが兵隊にとられ，豊橋には若い男の人がいなくなりました。そのため私は，銃剣術を女の人たちに教えていました。毎朝６時ぐらいから３０分程度，５０人ほどの女の人を敵の上陸に備え，竹やりで訓練していました。午後は，遺骨を受け取りに行くこともありました。女の人は受け取れなかったため，代わりに受け取ったのです。私のような立場の男は，「在郷軍人」*2 とよばれ，故郷を守ることが務めでした。

豊橋動物園に爆弾が落ち，豊橋も空襲の恐れが高まったため，妻と息子と娘を連れて，昭和２０年３月に豊橋から新城に疎開しました。６月２０日，豊橋が焼夷弾の空襲にあい，焼け野原になりました。牟呂用水の杭棒まで焼けるほどでした。それまで住んでいた私の家も燃えてしまい，隣の家のせんべい屋のおじいさんが，爆弾の直撃を受けて亡くなったと，後で聞きました。

---

*1　戦時中の日本では，米英やオランダ，中国との戦争を「大東亜戦争」とよんでいた。
*2　現役を離れた軍人をいう。出征の見送り，帰郷の出迎えや地域での訓練も行い，多くの役割を果たした。

８月７日，新城橋を渡る時，豊川海軍工廠へ落とされる焼夷弾を見ました。空が一面真っ赤になりました。Ｂ２９を高射砲で撃っても，飛行機の下の方で破裂してしまいました。まったく届かないのです。これはだめだと思いましたね。

私の家の近くの安吉さんの娘さんは，海軍工廠で亡くなったんですよ。戦争は，本当に多くの人にさまざまな運命を背負わせたのです。こうして生き残った私は，幸運が重なったおかげだと思っています。二度と人が人を殺すような戦争を起こしてはいけないと思います。

山本昇さんのアルバムから（１）



中国山東省で部隊仲間と記念写真
昭和十五年



▲ 出征時ののぼり



▲ 手りゅう弾を手に



▲ つかの間の休息　昭和１５年



▲ 中国の街の様子



▲ こうりゃん畑で



▲ 軍刀を持って記念写真　昭和１５年６月